武蔵野日曜集会 聖霊降臨節祈祷会

力の秘訣

――ヨハネ伝第14章1～6節、ロマ書第7～8章――

１９７３年６月10日
小池辰雄

福音書は魂の天国　われは道なり真理なり生命なり　力の秘訣　地獄のどん底から天国の頂上へ　救いの確かさはキリストの側

【ヨハネ14】

1『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。……

6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。

【ロマ7】

6然れど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の旧きによらず、霊の新しきに従いて事うることを得るなり。……

24噫われ悩める人なるかな、此の死の体より救わん者は誰ぞや。

【ロマ8】

1この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

●福音書は魂の天国

ペンテコステの最後の時がきました。O君が夜の司会をするようになったのも何か或る摂理のような気がしております。非常に魂をこめてよい司会をしてくれました。さきほどの感話祈祷会――O君も言っておりましたが――みんななかなか駄々っ子みたいなところもあるけれども、気の抜けたようなことを言っているのもいますけれども、しかし、いざとなれば気は抜けてないという、私は信頼を君たちにかけています。朝遅れたのも、何もそんなことを私はこだわるのではないので、それぞれののっぴきならない理由があったこともよく察しております。みんな非常にいい魂です。どうぞ、一人びとりは掛け替えのない使命をおびているという、だんだん、言わず語らずのうちに、我々は確かに使徒的な信仰の質を身に付けつつあるということを感じていると思う。どうぞ、これは他では得られないところの、上からきているところの恵みであり使命ですので、その気合で進んでくだ

さい。

まず、ヨハネ伝14章を開いてください。1節に、

「1『**なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。**」（ヨハネ14・1）

ところどころ聖書の句には、もう何ともいえない句がときどきある。私たちは、生まれつきの我々というものは心を騒がすものです。とかく波がたつ。しかし、

「波を立てるな」

と。ということは、

「神を信じ私を信ずるならば、神に信頼し私に信頼するならば」

と。海の波を静めたキリストです。嵐の中にも心を騒がせずに、平安に舟の中で眠っていたキリストです。そのキリストが、

「**心を騒がすな**」

と仰るときに、もう騒ぐ心をそのままキリストに委ねれば、静まってしまう。「心を騒がすな」と言われて、

「さて、ひとつ静めましょう」

なんていったってね、また騒ぐです。静まったと思ったらまた騒ぐ。どうぞ、キリストの言葉を単なるそういう命令として受けとらないでください。必ず裏付けがあるということ。

「心が騒がないようにしてやる」

ということです。波を静めたキリストです。この主イエス・キリストというのはもう何とも言えない方ですから。とにかく、福音書に来たら、ここは魂の故郷です。魂の故郷であり、魂の天国です。いつかヒルティが、

「もう一切のものを読むのをやめて、福音書のキリストの言葉だけを読め」

というようなことを言っているところがあります。キリストの言葉だけ、また実にキリストの行為だけ、要するに実にキリストだけです。ここに集中すると、パウロの書簡も全部、実は福音書のキリストから、またそれに帰るところのものです。

イエスという方はそういうように全く神と一つです。

「**神を信じ、我を信ぜよ**」

ということは、言葉は二つだが一つなんです。神を信ずることが同時に我（キリスト）を信ずることであり、我を信ずることが同時に神を信ずることなんです。これは二通りではない。

私たちが

「父よ！」

と祈るときも、

「主よ！」

と祈るのも、父と主は一つです。もうピタリ一つの一如、即如の世界にキリストはこの神に生きておられた。そういう意味で、「主さま」とか、あるいは「お父さま」とか、どう祈

ってもいいですけれども、必ずそこは一つなんです。そして、かく祈らしめるところの「主さま」の叫び、「父よ」の叫びは、これは御霊の叫びです。御霊が祈らしめている。「三位一体」なんて理屈で言う必要はない。もうピタッとそこは一つ。そこに乗っかっていれば、その信は即ち現(うつつ)の世界です。キリストがそこに御霊をもって私たちに現前と来ていらっしゃる。かく祈らしめているものは実は、本願の祈りがきているからです。そういったことで、

「心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

という。

「一体、どういうことを信ずるんですか」

と、すぐそういうように思うでしょ、普通の人は。神の事柄やキリストの事柄ではないんだよ。

「神をそのまま受けとれ、我をそのまま受けとれ」

ということが、信ずるということ。「受けとる」ということです。さっきから申し上げている「突入」です。体受、突入、これは同じことです。これが一つになっていなければダメなんです。身体で受けとる。それから、突入は今度は、投身でも何でもいいよ。言葉なんかには別にこだわるわけではないから。突入、投身。これがもう祈りの場です。祈りの姿です。

●われは道なり真理なり生命なり

何も私は今、ヨハネ伝14章を解説するのではない。大体、解説なんてものは嫌いなんだ。6節、

「6**イエス彼に言い給う『われは道なり、真理(まこと)なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。」**

「われは道なり、真理なり、生命なり」

ということ。私は「道」という言葉は非常に好きです。

「日本人は道の民だ」

と、D医科大学の校歌の第3節にも書いた。日本は道の民である。私たちにとっては、その道はもっとはっきりしている。キリストという霊道である。霊の道。このキリストという霊道に即する。これはもう物理法則よりか凄い。霊道は、どれが道だなんていって規定できない。その時その時にちゃんと道ならざる道が開かれていく。示されていく。これが霊道という。

「我は道なり」

という道はそうなんです。キリストという方に来てみると、自然にそこに歩かしめられるところが示されてくる。左に曲がり右に曲がっても、必ず真ん中に来るようになっている。不思議なんですよ、これは。だから、心配はいらん。大胆に間違ってみろ。そうしたら今

度は逆に引っ張りまわされるから。そういうようなわけで、「我は道なり」という驚くべき吸引力を持った道の道者がいる。

それから、

「**我は真理なり**」

という。これも頭で言うような真理ではない。

「真理とは何ぞや」

と言ったって、これは限定することのできるようなものはひとつも本ものではない。究極的なものではない。究極的なものは無限定なものです。真理も、

「これが真理でござる」

なんて説明できるものは本当の真理ではない。これはシナでいうと、老子がそのような角度からものを言っている。そういうキリストという、何とも説明のできない、しかし、ここに来てみると、本当の智慧が湧く。そこに本当の論理がある。論理ならざる論理がある。本当のロゴス（知）であり、本当のパトス（情）であり、本当のエトス（意）であるところの、そういった真理。真実存がそこに展開していくところのもとです。

それから、

「**我は生命なり**」

と。言うまでもなく、霊的生命です。

「**我は道なり、真理なり、生命なり**」

と、こう言われるキリストの権威は全く御霊の権威です。キリストの言は全部、御霊の権威をもって裏付けられている。だから、

「**わが言は霊なり、生命なり**」

という。ヨハネ伝6章のこの言は非常に大事な言です。説明ではない。意味ではない。霊であり生命であるという。

「**生命である**」

ということはキリストの言は直ちに生命づけるものなんです。また、霊づけるものである。霊を与えるものである。だから、キリストのこの御言に接すると、これは霊言であるから、私たちの中に聖霊がその御言と一緒に入ってくる。

「汝らが御霊を受けたのは、聞きて信じたるによりてか、律法を行ったことによりてか」

とパウロが言ったでしょ。聞きて信じたるによったという。

「聞いて受けとったら御霊を受けた」

というのはそのことなんです。本当に霊言を聞いてこれを信ずれば、そこには御霊は来るんです。そのようなわけで、「我は道なり、真理なり、生命なり」なんていうキリストの言を、いい加減な気持で読んでいたらダメですよ。

「我によらでは誰にても父の御許(みもと)に至る者なし」

と。もうはっきりしている。道はキリストを通る。生命はキリストを通る。真理はキリストを通って、この道であり真理であり生命である彼に――キリストは神の現象体としているんだから――キリストによらなければ父の御許に行かれない。

さっき、神、主と――神主(かんぬし)ではないけれども、主なる神――そして僕と言いました。使命的存在としての「主―僕」の関係において、御霊がくだる。平伏しですから。これは平伏しの絶対肯定で、

「汝の御意(みこころ)を成させ給え」

という、この姿は何といっても、「主―僕」の姿です。キリストが「汝の御意を成させ給え」と言うのは、どこまでもこの線で言われた。

今度は、「父―子」です。

「我と父とは一つなり」

と、「父よ」と言って本当に父の愛を受けとっていく。「主―僕」は、ここに義が生じている。これが義の体現体なんです。「父―子」、これは愛の身証的な事態です。即ち、「義と愛」は、「主僕と父子」においてはっきりとキリストは受けた。そして、この二つが絶対に離れない。この関係は絶対に離れない。これが本当に霊的構造なんです。

●力の秘訣

キリストが私たちについに十字架を通って「助け主」をくださいました。もう、「SOS」は言う必要がない。聖霊は我々の本当の助け主です。これは一番強いんだ。御霊という助け主が私たちの中に来て――あるいは「慰め主」と言う――キリストの愛を、力を私たちの中に与えてくださる。御霊を通して神・キリストが本当に我々の中に働きたもうのだから。これは無限無量ではないですか。有限の中に無限定なものが働くんです。

こんなうれしいことはないではないですか。それがその人を通して、勉強のことであろうと、仕事のことであろうと、何のことであろうと、行き詰まりを知らない働きを始める。運命・環境なにものぞと。何と思われたっていいよ。気にするな。「何をか！」というものがやってくる。決して、やせ我慢ではないですよ、どなたでも、女の方でも。相手が気の毒になる。

さっき、S姉のお話がありましたが、もうSさんは今晩から笑って、泣く必要はない。笑っていればいいんだ、そんなものは。

「ああ、かわいそうなものだ」

と言って。いろんなことを言うやつらは、かわいそうですから、そんなのはもう笑っていればいい。ニコニコしていればいいんです。それだけの力がこの御霊の人にはある。あまりこわがらなくていいですから。楽にやってください。そして、

「何かしらんけれども、あの人は本当の力があるな」

ということがわかってくる。御霊はそれだけの力を持っていますから、無限に。無限に深く突入し、溶けていく。もう溶け入ってください。これが本当に御霊に酔っているということです。なにも千鳥足ではないけれども。

聖霊の世界は、何をやろうと、本当にものの判断が、オリエンテーションがつくんです。いわゆる学者の判断よりかもっとすごい判断が出てくる。学問の世界であろうと、芸術の世界であろうと、何であろうと。

御霊の世界は私たちに無限無量なものを、そして本当の平安を――本当の平安とは力を持っていますから――与えてくれる。だから、私は今日は「力の秘訣」ということを言うんです。多少、身体の調子がどこか悪いところがあっても、「主さま！」と言って祈りかかって、自分でそこに手を置いてごらん。自分で按手できるから。ああ、グーッと来るから。

「手が届きません」

なんて言ったって、届かなくてたっていいよ。それから先はもう神さまがいいようにしてくださるから。按手というのはそういう不思議なものを持っているんです。自分で按手できる。片手を挙げて祈れば、これは霊界へのアンテナですから、上から来るですよ。そして、自分の悪いところに手を当てれば、上からグーッと来ているから、これは楽になる。自然にそうなる。

いろんな公害現象が起きているが、物理的な公害に対して霊的な力でもって勝っていかなければ、これからこの20世紀は乗り切れないですよ、いい加減な信仰では。草根木皮は非常に結構ですが、草根木皮よりかもうひとつ結構なのは、これは御霊です。御霊という霊薬です。ずっと昔の東方の神学者が、

「御霊は霊薬だ」

と言ったのがある。

助け主は、必ず助けて救ってくださる。もう霊肉渾然として私たちを根底の現実においては必ず勝ってくださる。それは信じこんで行きなさいよ。

「どうも調子がわるいが、どうだろう」

なんて、いつまでも現象にとらわれないようにね。御名によって祈る者には必ずキリストが成し給うということを、信ずるとはその点で本当に100パーセントです。根源現実の信仰は100パーセント、120パーセントです。なぜ、そんなことを私が言うかというと、こちらの悲願の願いよりも本願の内容が凄いんだから。悲願以上なものが聞かれているんです。悲願が聞かれないと思ったら、どっこいもうひとつもの凄いものが聞かれてくる。

結婚問題、就職問題、受験問題、いろんなことでもって不如意なことがあるでしょう。いいよ、そんなのは。もうひとつ先の世界にキリストは本願をもって我に最善を成し給うということを信じ込んで行きなさい。もうその人は本当に勝っているんですよ。そこで勝っ

てごらん。もう何かしらんけれども、その時からグーッと力が出てくるから。今まで何をくすぶっていたんだろうかと。

●地獄のどん底から天国の頂上へ

ローマ書8章にいきます。

「1**この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。**」（ロマ8・1）

パウロがローマ書8章の一番先に開口一番、「この故に」と言っている。何が「この故に」かと思えば、これは7章6節にかかってくるんです。それからもちろん7章の終わりの方にも別にかかりますけれども、一番直接的には7章6節にかかってくる。

「6**然れど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法（おきて）より解かれたれば、儀文の旧（ふる）きによらず、霊の新しきに従いて事（つか）うることを得るなり。**」（ロマ7・6）

ときて、それで「この故に」とくるんです。

そういう直接的なかかりと、もう一つのかかりとしては、7章の後半のところの霊と肉の戦い、罪と義の戦いのところです。手離しの生まれつきの我というものは、

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体（からだ）より救わん者は誰ぞや」（ロマ7・24）

と言って、我々はこの「死の体」なんだ。この世の人たちは、どんなに元気そうにみえたって、本当の元気は持ってない。それは空元気なんです。あなた方はどんなにしょげても、

「どっこい、私の一番奥には本当の力がありますぞ」

という人でなければダメだよ。

「お前が死の体（からだ）のような悩める者だから、私は救うんだよ」

と言うんだ、キリストの方は。「こんな者をも救う」のではない。

「こんな者だから救ってやる」

というんです。「私のような者をも」なんて言って、謙遜なようなことを言うけれども、

「私のような者ですから、どうぞ救ってください。必ず救われます」

と。しょうがない者をキリストは相手になさるんだから、福音というのは。

そうすると、地獄のどん底と思ったところが、今度は天国の頂上になる。とにかく、そのような転換をいつでもできなければダメですよ。そうしたら、いかなる現実に対しても絶対に、

「**一切の秘訣を得たり**」

ということになる。相対的に善さそうなもので安心なんかしやしない。もっと凄い善き世界に入っていく。相対的なプラス・マイナスも問題にあらず、本当のプラスの世界に入っていく。これがこの御霊の世界なんです。

●救いの確かさはキリストの側

だから、

「[1]**この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。**」（ロマ8・1）

罪の力がないんですから、罪に定められないに決まっている。キリスト・イエスに在る者は――キリスト・イエスは「罪・死・黄泉（よみ）・サタン」に勝ち給うたものだから――この勝利者、常勝将軍であるキリストの中にある者は罪に定められっこない。罪の力の外にあるんだから。キリストの力の中にあるんだから。

いいですか。

「自分の信仰が、自分の実存が心配だから、どうも救いは不確かです」

なんてのは、そんなのは百年たったって、二百年たったって、救いは不確かだよ。我々の救いの確かさというものは、キリストの側にあるのだから。こちら側の信仰いかんにあるのではない。ダメだからこそ救うというのが恵みなんだから。それを無条件で受けとる他に受けとり方がないじゃないですか。条件をつけて受けとるつもりですか。どうぞ、条件をつけてくださいよ、勇気のある人は。私は勇気がないから、無条件で受けとる。

無条件で受けとります。それだから、無条件にその世界に入ります。だから、無条件にもの凄い力が来ます。痛みもはっきりもうそれでキリストは取ってしまう。悩みも取ってしまう。そして、悩みも痛みもない本当の砕けのところから、本当の玉成のところに来てしまう。展開してやまずというところに来てしまう。

私は何歳になったって――明日死ぬかもしれないよ――けれども、私は君たちを心配しないんだ。君たちは必ず立つと思う。それだけのことを私を通して神さまは与えているから。忘れたら、テープ（録音）をつけてごらんよ。私は生けるがごとくに、テープを通して君たちに叫びかけるから。いや、テープどころではない。時には夜に現れるからね（笑）。

「[2]**キリスト・イエスに在る生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）は、なんじを罪と死との法より解放（ときはな）したればなり**」（ロマ8・2）

と。この「キリスト・イエスに在るものは」の、「に在る」というのが非常に大事なんだ。「に在ろうものは」でも何でもない。現に在るものです。もうすべてが現実ですから。

「**キリスト・イエスに在る生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）は**」

という。聖霊は生命である。それが本当に霊妙なる法（のり）の世界、自由なる法の世界です。その法に乗っかればいい。

「**なんじを罪と死との法より解放（ときはな）したればなり**」

と。もうあとは読みません。

とにかく、生まれつきの我というものを「肉」とここでさかんに言っている。即ち、生まれつきの我、従来の旧き全人によって動くものは、どんなにそれが善さそうであっても、

神に逆らうものである。ところが、「霊」「新しき我」というものがどんなに破れ器であっても、霊人というものは必ず勝っていく。

間違えては困るですよ。「全人」、全き人というのは完全ということではない。その人全体ということなんです。全的に区分のできない人ということです。完全な人のことを全人と言っているのではない。これはまるで毛虫に食われた葉っぱみたいなやつだっていいんだよ。けれども、それは一つの全体なんです。その全体として、御霊が来ている。これが霊の人です。

ところが、旧き全人はどんなにそれが立派なものがあっても、それはダメなんです。それはいくら善くたったて、そんな相対的なものはダメですよ。無限者との交通がないものは、どんなに善さそうで、どんなに理想主義や浪漫主義なんてやったって、これはみんなくたびれてしまって、放物線をえがいて落ちてしまう。ところが、こっちは上から来るから、これはずーっと上にあがっていくんだ。必ずそうなんです。

パウロが「肉の人」「霊の人」と言っているのは、そのはっきりした区別を言っている。けれども、内容そのものは、賜りたるところのその人らしいものがある。賜りたるその人らしいものは本当に神的に動くか、人間本位に動くかと、これだけなんです。神的に動くものが霊である。人間本位に動くものが肉であると、こういう話です。これ（霊）が神の栄光を現す。こっち（肉）は結局、争いになる。憎み争いになる。自分を立てるから。神を立てていないから。平和なんか絶対に来ない。

そういった意味において、

「キリストの御霊が在る新しき全人となれよ」

ということです。そうすると、キリストの御霊がある者だけが本当にキリストに属するキリスト者であって、

「キリストの御霊なき者はキリスト者にあらず」

と、もうはっきりしてくる。似て非なるところのクリスチャンがたくさんいる。悪くはないよ、観念的なクリスチャンでも。何も悪いとは言いやしない。けれども、

「それではお気の毒でございます、本当の天国人とは質がちがう」

ということです。それは論より証拠、魂の世界はごまかしがきかないから、自分が本当にそのものをいただいているかわかる。何かまだ考えている世界、思っている世界、理解している程度なんていう、たくさんの種類があるよね。私はながいこと、この御霊の世界に達しない無教会時代というのがあったけれども。